

## 〈紹介〉

# 榎本隆司編著 『教科教育研究 国語』

岩 崎 淳

本書の「序章 教師であるということ」には、次のような文章がある。

生徒のために力いっぱい努力すること、それが教師の仕事の第一である。そして日々、その努力が有効に実るための手だてを考え、授業の方法を模索しつづけることが必要である。

この本は、そういう教師のために、またそういう教師たろうとする人々のために、日頃から熱心に勉強し、考え、実践してきている仲間たちと編んだ。

編集者が「仲間たち」と呼んでいるのは、岸洋輔、高野光男、野村敏夫、町田守弘、柳瀬喜代志、芳澤隆の六氏のことである。右のような考えで編まれた本書には、さまざまな授業のあり方が示され、また、国語教育における問題点がとらえられている。

序章に続く「Ⅰ章 国語科の教師である前に」では、教師とはどのような存在であるのかを説き、教師としての出発点を再確認

する。

「Ⅱ章 歴史の展望と今日の課題」では、明治期から戦後までの国語教育史を制度の面からたどり、今日の課題を提示する。

「Ⅲ章 教材の発掘と教材研究」では、『楳嶺節考』と『最後の一句』を取り上げ、教材研究のあり方について述べている。

本書の七割をしめる「Ⅳ章 指導の実際（研究と方法）」では、中学から大学までの授業の実践報告と指導方法の研究について述べられている。扱われている作品は、『フシダカバチの秘密』『坊っちゃん』『羅生門』『螢川』『手づくり幻想』『朝のリレー』

『青い花』『悲しき玩具』『伊勢物語』『長恨歌』『論語』などにおよび、指導および研究の内容も、語彙、読書、作文、スピーチ、大学生による模擬授業、方言地図の作成、物語創作、文語文法、漢文の教材選定など多岐にわたっている。それぞれよく研究されていて、各執筆者の研鑽ぶりが伝わってくる。

一例をあげると、「短歌教材と表現指導」（高校）では、『悲しき玩具』全編を読み、それによって喚起されたものを自由に表現

する（感想文に限らず、創作であつてもよい）という指導がなされている。さらに、提出された作文の中から代表十六編を印刷して生徒に配り、それに対して感想文を書くといった授業が展開される。

「どんな理論にも勝つて実践が大事である」「教科研究は実践によつてのみ証し立てられる。すべては実践であるとさえ言つていい」とくり返し述べられているように、本書では理論よりも実践や実際の授業を前提とした研究を重視している。教職を志す学生にはもちろん、現職の教員にも好個の書である。

（一九九三年四月発行 学文社刊 A 5 二五三ページ 二五〇〇円）